

I. 導入

おはようございます。先週、パウロがエフェソの教会に語ったメッセージの内容を学びました。パウロは自分の使命に対する姿勢を使徒20:24でこのように語っています。「しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。」パウロは、神に与えられた使命を中心に生きていました。人ではなく神を喜ばせることに焦点を置きました。



今日の聖書箇所、エルサレムへの到着とともにパウロの第三次宣教旅行が終わります。元々、アンティオキアから始まった旅でしたが、パウロはローマの兵士に捕えられ、アンティオキアに戻ることはできませんでした。パウロの一行は、途中あらゆる場所に立ち寄りました。こうして、多くの町の信徒たちに顔を見せることができました。経由地が多かったのはおそらく、小型の商業船に乗せてもらったからでしょう。このようにして、彼らはミレトスからカイサリアを船で旅し、その後エルサレムへと陸路を進みました。



ではまず、使徒21:1-14を読みましょう。

II. 聖書朗読 (使徒言行録21:1-14, 新共同訳)

21:1 わたしたちは人々に別れを告げて船出し、コス島に直航した。翌日ロドス島に着き、そこからパタラに渡り、21:2 フェニキアに行く船を見つけたので、それに乗って出発した。21:3 やがてキプロス島が見えてきたが、それを左にして通り過ぎ、シリア州に向かって船旅を続けてティルスに到着した。ここで船は、荷物を陸揚げすることになっていたのである。21:4 わたしたちは弟子たちを探し出して、そこに七日間泊まった。彼らは“霊”に動かされ、エルサレムへ行かないようにと、パウロに繰り返して言った。21:5 しかし、滞在期間が過ぎたとき、わたしたちはそこを去って旅を続けることにした。彼らは皆、妻や子供を連れて、町外れまで見送りに来てくれた。そして、共に浜辺にひざまずいて祈り、21:6 互いに別れの挨拶を交わし、わたしたちは船に乗り込み、彼らは自分の家に戻って行った。

21:7 わたしたちは、ティルスから航海を続けてプトレマイスに着き、兄弟たちに挨拶して、彼らのところで一日を過ごした。21:8 翌日そこをたってカイサリアに赴き、例の七人の一人である福音宣教者フィリポの家に行き、そこに泊まった。21:9 この人には預言をする四人の未婚の娘がいた。21:10 幾日か滞在していたとき、ユダヤからアガボという預言する者が下って来た。21:11 そして、わたしたちのところに来て、パウロの帯を取り、そ

れで自分の手足を縛って言った。「聖霊がこうお告げになっている。『エルサレムでユダヤ人は、この帯の持ち主をこのように縛って異邦人の手に引き渡す。』」21:12 わたしたちはこれを聞き、土地の人と一緒にあって、エルサレムへは上らないようにと、パウロにしきりに頼んだ。21:13 そのとき、パウロは答えた。「泣いたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです。」21:14 パウロがわたしたちの勧めを聞き入れようとしないので、わたしたちは、「主の御心が行われますように」と言って、口をつぐんだ。

III. 教え

パウロの一行は、滞在先で必ずクリスチャンを見つけることができたようです。使徒2章で教会が生まれてたった25年で、現在のギリシャ、トルコ、シリア、レバノン、イスラエルにあたる各地に教会がすでに存在しました。教会の始まったころ、イエスの福音はローマ帝国中に急速に広まりました。たった今読んだ個所では、ティルスとプトレマイスのクリスチャンを訪れた後、パウロたちはカイサリアに到着し、福音宣教者フィリポの家に滞在したとあります。



フィリポは立派な人でした。使徒6章で、食事の分配係として選ばれた7人の一人です。やもめに食事を分配する奉仕の働きに加え、優れた説教者でもありました。フィリポの働きについては、使徒8章で学んだことを覚えておられる方もいらっしゃるでしょう。使徒8:5にはこのようにあります。「フィリポはサマリアの町に下って、人々にキリストを宣べ伝えた。」彼のメッセージに大勢の人々が応答し、イエスを信じて洗礼を受けました。使徒ペトロと使徒ヨハネがサマリアに行って働きに加わるほどの大反響でした。



フィリポの働きの中でもっともよく知られているのは、エチオピアの宦官にイエスの福音を分かち合った話でしょう。使徒8:35には、フィリポが宦官の読んでいたイザヤ書の一節を用いてイエスのことを話したと記されています。「そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの個所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた。」



使徒8:38で、エチオピア人の宦官は信じて洗礼を受けました。「そして、車を止めさせた。フィリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、フィリポは宦官に洗礼を授けた。」この後、主の御霊がフィリポを連れ去り、洗礼を受けたばかりの男性は喜んで旅を続けました。伝承によると、この男性は故郷のエチオピアでキリストを信じる信仰に多くの人を導



いたそうです。使徒8章の記録から、フィリポが福音宣教者と呼ばれるだけの理由があることがわかります。事実、使徒言行録の中で福音宣教者と呼ばれているのはフィリポただ一人です。

使徒8:40はこう語ります。「フィリポはアゾトに姿を現した。そして、すべての町を巡りながら福音を告げ知らせ、カイサリアまで行った。」使徒21章で、フィリポはなおカイサリアに留まっており、預言をする未婚の娘が4人いました。しかし、パウロが訪れた際、娘たちが預言したという記録は残されていません。ここに記されているのは、アガボという人の預言です。

使徒21:11 「そして、わたしたちのところに来て、パウロの帯を取り、それで自分の手足を縛って言った。「聖霊がこうお告げになっている。『エルサレムでユダヤ人は、この帯の持ち主をこのように縛って異邦人の手に引き渡す。』」これを聞いた人々は、エルサレムに行かないようパウロに頼みました。しかし、パウロは聖霊が導いておられることを確信していました。ですから、預言による警告が与えられたのは、パウロをはじめとする人々に、前もって心の準備をさせることが目的だったのでしょう。パウロもそのようにとらえたようです。エルサレムに行く決意は変わりませんでした。



続いて、使徒21:15-25を読みましょう。

IV. 聖書朗読(使徒言行録21:15-25,新共同訳)

21:15 数日たって、わたしたちは旅の準備をしてエルサレムに上った。 21:16 カイサリアの弟子たちも数人同行して、わたしたちがムナソンという人の家に泊まれるように案内してくれた。ムナソンは、キプロス島の出身で、ずっと以前から弟子であった。 21:17 わたしたちがエルサレムに着くと、兄弟たちは喜んで迎えてくれた。 21:18 翌日、パウロはわたしたちを連れてヤコブを訪ねたが、そこには長老が皆集まっていた。 21:19 パウロは挨拶を済ませてから、自分の奉仕を通して神が異邦人の間で行われたことを、詳しく説明した。

21:20 これを聞いて、人々は皆神を賛美し、パウロに言った。「兄弟よ、ご存じのように、幾万人ものユダヤ人が信者になって、皆熱心に律法を守っています。 21:21 この人たちがあなたについて聞かされているところによると、あなたは異邦人の間にいる全ユダヤ人に対して、『子供に割礼を施すな。慣習に従うな』と言って、モーセから離れるように教えているとのこと。 21:22 いったい、どうしたらよいでしょうか。彼らはあなたの来られたことをきつと耳にします。 21:23 だから、わたしたちの言うとおりにしてください。わたしたちの中に誓願を立てた者が四人います。 21:24 この人たちを連れて行って一緒に身を清めてもらい、彼らのために頭をそる費用を出してください。そうすれば、あなたについて聞かされていることが根も葉もなく、あなたは律法を守って正しく生活している、ということがみんなに分かります。 21:25 また、異邦人で信者になった人たちについては、わたしたちは既に手紙を書き送りました。それは、偶像に献げた肉と、血と、絞め殺した動物の肉とを口にしないように、また、みだらな行いを避けるようにという決

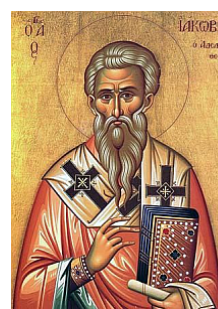
定です。」

V. 教え

エルサレムで、パウロはムナソンというキプロス出身の男性の家に泊まりました。ムナソンはイエスをずいぶん前から信じる信徒でした。ムナソンは後にキプロス島の司教となり、ギリシャ正教会では聖人として尊ばれています。これは五旬節のころですから、エルサレムは祭りのために上ってきた旅人たちであふれていたでしょう。この繁忙期に、パウロの宿泊先を手配しようと弟子たちが骨折ったことがうかがえます。



パウロは、神が異邦人の間でなされたすべてを、エルサレムの教会の長老であるヤコブに報告しました。人々はこの素晴らしい報告を聞いて喜びました。新約聖書で、ヤコブという名の方は3人います。この使徒21章で登場するヤコブは、ヤコブの手紙の著者であり、マタイ13:55およびガラテヤ1:19に登場するイエスの弟のヤコブです。イエスの兄弟姉妹について、実はいどこであったとか、ヨセフの先妻の子であったとか、さまざまな仮説が唱えられていますが、マリアが聖霊の力によってイエスを生んだ後、ヨセフとマリアは夫婦として暮らし、他の子どもたちを授かったというのが自然な説明でしょう。カトリック教会は、この説明を受け入れられないようです。マリアが生涯処女であったという聖書的な裏付けのない教理があるからです。



どちらにせよ、ヤコブの名をとくに挙げていることから、ヤコブがエルサレムの教会指導者として重要な役割を果たしていたことがわかります。ヤコブはパウロの報告を聞いて神をたたえましたが、同時に懸念事項も挙げました。エルサレムでは、多くのユダヤ人信徒たちが、イエス・キリストを信じると同時に、敬虔なユダヤ教徒としてモーセの律法を守り続けました。私たちにはこれはあり得ないことのように思えるかもしれませんが、初代教会の時代は変遷のときでした。イエスをメシアと認めるユダヤ人は、ユダヤ人としての生活様式を変える必要性を感じませんでした。ヤコブたちにすれば、異邦人がモーセの律法を遵守する必要がないことを認めれば十分と考えていました。神殿での礼拝をはじめとするユダヤ教の慣わしをユダヤ人クリスチャンがやめる必要性が見当たらなかったのです。紀元70年にローマ帝国が神殿を破壊してから、これらのことは変わっていきます。しかし、この時点ではまだそれは十年以上先のことです。

ユダヤ人クリスチャンの間では、パウロについてのうわさが広まっていました。パウロは、異邦人はモーセの律法を守る必要はないと主張しました。このことで、パウロはモーセの律法を否定していると誤解されたのです。教会の調和を保つため、この誤解を解くことが不可欠だと、ヤコブは感じました。そこでヤコブは、ある提案をします。誓願を立てた4人の者を使って、パウロがモーセの律法を守っていることを表すというものでした。ヤコブは言いました。使徒21:24「この人たちを連れて行って一緒に身を清めてもらい、彼らのために頭をそる費用を出してください。そうすれば、あなたについて聞かされていることが根も葉もなく、あなたは律法を守って正しく生活している、ということがみんなに分かります。」

パウロも教会の調和を望んでいました。それ以上に、イエスの愛をユダヤ人の同胞に伝える機会を待ち望んでいました。これは、パウロがコリント第一9:20で書いたことを実践するよいチャンスとなりました。「ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を得るためです。」

パウロはヤコブの提案を受け入れました。では、今日の聖書箇所最後の、使徒21:26-39を読みましょう。

VI. 聖書朗読 (使徒言行録21:26-39, 新共同訳)

21:26 そこで、パウロはその四人を連れて行って、翌日一緒に清めの式を受けて神殿に入り、いつ清めの期間が終わって、それぞれのために供え物を献げることができるかを告げた。 21:27 七日の期間が終わろうとしていたとき、アジア州から来たユダヤ人たちが神殿の境内でパウロを見つけ、全群衆を扇動して彼を捕らえ、 21:28 こう叫んだ。「イスラエルの人たち、手伝ってくれ。この男は、民と律法とこの場所を無視することを、至るところでだれにでも教えている。その上、ギリシア人を境内に連れ込んで、この聖なる場所を汚してしまった。」 21:29 彼らは、エフェソ出身のトロフィモが前に都でパウロと一緒にいたのを見かけたので、パウロが彼を境内に連れ込んだのだと思ったからである。

21:30 それで、都全体は大騒ぎになり、民衆は駆け寄って来て、パウロを捕らえ、境内から引きずり出した。そして、門はどれもすぐに閉ざされた。 21:31 彼らがパウロを殺そうとしていたとき、エルサレム中が混乱状態に陥っているという報告が、守備大隊の千人隊長のもとに届いた。 21:32 千人隊長は直ちに兵士と百人隊長を率いて、その場に駆けつけた。群衆は千人隊長と兵士を見ると、パウロを殴るのをやめた。 21:33 千人隊長は近寄ってパウロを捕らえ、二本の鎖で縛るように命じた。そして、パウロが何者であるのか、また、何をしたのかと尋ねた。 21:34 しかし、群衆はあれやこれやと叫び立てていた。千人隊長は、騒々しくて真相をつかむことができないので、パウロを兵営に連れて行くように命じた。

21:35 パウロが階段にさしかかったとき、群衆の暴行を避けるために、兵士たちは彼を担いで行かなければならなかった。 21:36 大勢の民衆が、「その男を殺してしまえ」と叫びながらついて来たからである。 21:37 パウロは兵営の中に連れて行かれそうになったとき、「ひと言お話ししてもよいでしょうか」と千人隊長に言った。すると、千人隊長が尋ねた。「ギリシア語が話せるのか。 21:38 それならお前は、最近反乱を起こし、四千人の暗殺者を引き連れて荒れ野へ行った、あのエジプト人ではないのか。」 21:39 パウロは言った。「わたしは確かにユダヤ人です。キリキア州のれっきとした町、タルソスの市民です。どうか、この人たちに話をさせてください。」

VII. 教え



パウロのうわさは、ユダヤ人信徒だけでなくユダヤ人全体に広まっていた。パウロに対する非難はまったくの言いがかりでした。神殿にいるパウロを見たユダヤ人が群衆を扇動して、ギリシャ人を神殿の境内に連れて入ったと責め立てました。人々は暴徒と化し、パウロを神殿の外に引きずり出して殺そうとしました。ローマ帝国の千人隊長がそのことを知り、事態を收拾させようと兵士とともに駆けつけました。

この写真は、パウロの時代の神殿の様子を表す模型です。神殿が中央にあり、周りに広い境内があります。右奥に大きな建物があるのが見えるでしょうか。これはアントニア要塞です。ローマ帝国は、この要塞と兵舎を神殿横に建てて、神殿内部の様子を見張っていました。有事の際にすばやく対応するためです。



群衆がパウロに襲いかかった時、ローマ帝国の千人隊長はすぐさま対応しました。パウロは神殿の外に引きずり出されましたが、まもなく兵士たちに助け出され、兵舎へ連れて行かれました。パウロが千人隊長に話しているとき、アントニア要塞に続く階段の上部にいたと思われま。千人隊長は最初、パウロが問題を起こしていたエジプト人かと思いましたが、パウロがギリシャ語で礼儀正しく話したので、教養のある人だということに気づきました。

使徒21:39で、パウロは千人隊長にこう答えます。パウロは言った。『わたしは確かにユダヤ人です。キリキヤ州のれっきとした町、タルソスの市民です。どうか、この人たちに話をさせてください。』」暴徒に殺されそうになり、そのあとローマ帝国の兵士たちに縛られたら、ほとんどの人なら自分の命を守ろうと必死になるでしょう。しかし、パウロの思いは兄弟姉妹であるユダヤ人の救いがありました。眼下には、怒った群衆がいます。パウロはその人々を恨みや恐れのみではなく、あわれみと愛をもって見ました。千人隊長に向かって、穏やかながらも説得力のある語り口で話し、群衆に語る許可を得ようとします。

アントニア要塞に続く階段の最上部で、パウロはイエスと出会った経験を中心とするすばらしい伝道メッセージを語ります。この内容については来週詳しく見たいと思います。今日のメッセージを終える前に、パウロの勇気ある態度に注目したいと思います。パウロは二本の鎖につながれていたと聖書は語ります。おそらく、両側にいる看守に片手ずつつながれていたのでしょう。パウロは、先ほどまで怒りにまかせて自分を殴り、殺そうとしていたユダヤ人の群衆の前に立ちました。パウロはローマ兵によって捕われの身となりました。ローマ兵とて、群衆よりよい扱いをしてくれるとは限りません。群衆は怒り狂い、秩序を失っています。一方、ローマ兵はよく統制されており、秩序があります。しかし、慈悲深いとは言えません。パウロを厄介者だと判断すれば、暴力や処刑もあり得るでしょう。

パウロは悪事を働いたわけではありません。しかし、ユダヤ人とローマ人のどちらの間においても、間違った告発内容のために殺される可能性がありました。それでもパウロは、自分の命の心配をしません。ただ、自分に与えられた任務を遂行すること、自分の道のりを走りぬくこと

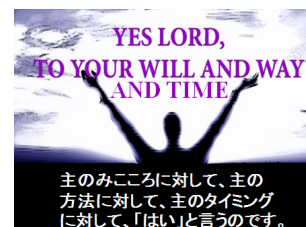
に集中します。パウロの唯一の願いは、どんなときにもイエスを告げ知らせることです。フィリピ1:21で、パウロはこう書きました。「わたしにとって、生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです。」アントニア要塞の階段に佇むパウロの姿は、この言葉のとおりを生き抜いた証です。



VIII. 結び

カイサリアで、兄弟姉妹たちはパウロにエルサレムに行かないよう頼みました。パウロがエルサレムで捕えられ縛られるとアガボが預言したからです。その預言が今成就しています。その預言が与えられた時、パウロはなんと答えたでしょう。使徒21:13「そのとき、パウロは答えた。『泣いたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです。』」

パウロはイエスの名のために生きました。そして、イエスの名のために死ぬ覚悟がありました。私たちはどうでしょう。イエスの名のために何をしようと思いませんか。私たち一人一人、この問いについて自分の心を探ってはどうでしょうか。「私は、イエスの名のために何をしようと思っているだろうか」と自分に問いかけてみてください。イエスは私たちのために命を捧げるほど、愛してくださいます。私たちは、このお方のために何をしようか。イエスに仕えなさいと召されたら、「はい主よ、あなたのみことろと道と時にお任せします」と答えるでしょうか。



祈りましょう。

IX. 祈り